

北海道価値創造パートナーシップ会議 i n 函館
～新たな北海道総合開発計画に向けて～

日時：平成27年9月9日（水）14：00～16：30

場所：函館北洋ビル 8階 大ホール

次 第

1. 開 会
2. 出席者紹介
3. 出席者からの活動や取組の概要紹介
4. 国土交通省北海道局説明
 - ・新たな北海道総合開発計画の中間整理の概要について
5. 意見交換
6. 閉 会

1. 開 会

○**小林開発計画課長** ただいまから北海道価値創造パートナーシップ会議 in 函館～新たな北海道総合開発計画に向けて～を開会したいと思います。

本日は、皆様、お忙しいところをお集まりいただき、誠にありがとうございます。

私は、この会議の進行を担当させていただきます、北海道開発局の小林と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

すみません、以降、座って進行の方を進めさせていただきたいと思います。

この会議は、後ほど御説明させていただきます、新たな北海道総合開発計画の中間整理について、北海道内各地域の課題解決や活性化に日ごろから活躍しておられる方々から御意見等をお伺いし、新計画の立案に活かすとともに、関係者相互の協力関係構築の促進も図ることを目的として開催させていただくものです。

本日の会議は、マスコミの皆様を含め、一般の方々に傍聴いただいております。

また、本日の配付資料でございますが、資料1から7までとなっております。過不足がございましたら、随時、事務局の方にお申しつけくださいますようお願いいたします。

なお、本日の議事録及び資料につきましては、後日、国土交通省のホームページに掲載することを予定しておりますので、御承知おきください。

それでは、まず初めに、国土交通省を代表して、岡部北海道局長から一言御挨拶申し上げます。

○**岡部北海道局長** 北海道局長の岡部でございます。

今日は何かとお忙しい中、また、天候もあまり良くない中、お集まりをいただきましてどうもありがとうございます。

また、傍聴の方もたくさん来ていただきまして、重ねて御礼を申し上げたいと思います。

今、司会の方からも話がありましたように、この会、北海道価値創造パートナーシップ会議 in 函館というふうに銘を打っております。新たな北海道総合開発計画の策定ということでございます。

御承知の方もいらっしゃるかもしれませんが、北海道総合開発計画と申しますのは、もともと北海道開発法という法律がございまして、これに基づいて、北海道の開発計画を国として決定するという計画でございます。現在は第7期の計画を進めておりますが、次の計画をどういう計画にしようかということで、今、盛んに議論をしているところでございます。

石田先生、谷口先生、いらしておりますけれども、国交省の中に国土審議会北海道開発分科会という審議会がございまして、そのもとに、新たな計画を作るための計画部会というのを作っておりますけれども、そこでお二方の先生には色々御議論をいただいております。

そういう計画策定のプロセスの中で、東京の霞が関だけで計画を作るのではなくて、北

海道の各地域、あるいは各分野で活躍されている方から色々なお話を聞きながら、是非そういうことを計画に反映させていきたいということで、こういう活動を全道各地で今やらせていただいているところでございます。

1月から検討が始まりまして、今、ちょうど中間ぐらいになっておりまして、中間整理というものがある程度形ができておりますので、それをたたき台にして、また、今日、色々御意見をいただければと思っております。

また、計画は、やっぱり作るだけではなくて、それをいかに実施するかということでございます。計画を作るプロセスでも、こういうふうに各地域の方々に御意見をいただきましたと思っておりますが、その計画を、今後、実際に実施する段階でも、今回の御縁をもとにして、また色々皆様に御協力をいただいたり、御助言をいただいたりして進めていければなということも思いながら、今日は皆様の御意見を聞かせていただこうと参っております。時間に限りがございますけれども、ひとつよろしく願いしたいと思っております。

簡単でございますが、開催に当たっての御挨拶とさせていただきます。今日はどうもありがとうございます。(拍手)

○小林開発計画課長 ありがとうございます。

申し訳ございませんが、報道の関係者の方々を始め傍聴の皆様のカメラ撮影はここまでとさせていただきます。よろしく願いいたします。

2. 出席者紹介

○小林開発計画課長 続きまして、本日御出席の皆様を御紹介申し上げます。

まず、猪飼秀一様。(拍手)

大内さおり様。(拍手)

谷まゆ子様。(拍手)

中野晋様。(拍手)

服部真弥様。(拍手)

室谷元男様。(拍手)

それから、国土審議会北海道開発分科会計画部会の出席者を御紹介させていただきます。

石田委員でございます。(拍手)

谷口委員でございます。(拍手)

国土交通省側の出席者を紹介いたします。

岡部国土交通省北海道局長です。(拍手)

鎌田国土交通省北海道局参事官でございます。(拍手)

難波江北海道開発局開発監理部次長でございます。(拍手)

柳屋北海道開発局函館開発建設部長でございます。(拍手)

それでは、ここから先の司会につきましては、石田委員をお願いさせていただきます。

存じます。よろしくお願ひいたします。

○石田氏 筑波大学の石田でございます。事務局からの御指名でございますので、ここから先の司会は私が務めさせていただきますので、改めましてどうぞよろしくお願ひいたします。

3. 出席者からの活動や取組の概要紹介

○石田氏 私自身もそうですが、初めてお顔を合わせておりますので、最初に、御出席の皆様から、各地域での日ごろの活動や取組の概要などについて、自己紹介を兼ねて御紹介いただければと思います。誠に恐縮でございますけれども、時間が限られておりますので、3分を目途ということで、本当に申し訳ございませんけれども、お願ひをしたいと思います。

最初でございますけれども、猪飼様、大内様という、あいうえお順でお願ひしたいと思います。

まず最初、猪飼様、お願ひいたします。

○猪飼氏 公益財団法人函館地域産業振興財団専務理事の猪飼でございます。

お手元に資料3と銘打たせていただいておりますが、A4、本当にノンビジュアルで、文字と数字ばかりの、何かいかにも役人が作ったような資料で申し訳ないのですけれども、これを参考にしていただければと思います。

私どもの財団は、資料の1ページの概要のところにありますように、函館地域の高度技術産業集積の促進・活性化を目指し、桔梗町の函館テクノパーク内にある北海道立工業技術センターと函館市の産業支援センターの管理運営を行っております。地域の企業の技術力を高め、新製品、新商品の開発や、高付加価値化のお手伝いをしております。

抽象的なので、ちょっと分かりにくいかと思いますが、では具体的にどういうことですかということになります。私はいつもこれを聞かれるときに、ガゴメ昆布のことを例に挙げさせていただいております。ガゴメ昆布の製品化の研究開発をしているところですよと言いますと、大体函館の皆さん方は納得いただけるという状況ではないかと思っております。

資料の2ページの方、裏の方になると思いますが、ここに7の最近の話題等のところで、平成15年度から25年度まで、これは文科省の支援を受けたわけなのですが、函館マリンバイオクラスターと銘打ちまして、地域の資源を産学官連携して研究開発してきました。函館は真昆布が産地として有名でございますけれども、一部、混生しているため、当初は邪魔者扱いで、経済的な価値というのは高くはないものであります。これがフコイダンという成分があるということがわかりまして、免疫力を高めるのです。それで製品化が進みまして、200品目以上というふうになっておりますし、四角の中に書いていますが、今、値段も、浜値は真昆布よりガゴメ昆布の方が高い状況になってきております。

また、(2)、その下にありますように、技術力を活かしまして、工場の新設とか、ある

いは、これから新幹線が上がってきますけれども、そういったこともありまして、研究施設の函館への進出というのが見られておりますが、これはいずれも技術力との関係で、私どもセンターがかかわりを持たせていただいております。

それから、3ページの(6)をちょっと見ていただきたいのですが、国土交通省様には、昨年、地域づくり活動支援整備事業に採択をいただきまして、道南食と観光クラスター型6次産業化推進協議会を立ち上げさせていただきました。私ども財団が事務局、北大水産科学研究院、今日、参加いただいております北洋銀行の函館中央支店さん、渡島総合振興局、いわゆる産学官金による協議会を立ち上げまして、事業体であるねばねば本舗やフード館への中間支援活動等を行ってまいりました。国土交通省様がいわゆる実動的な協議会を設けていただく機会を与えてくださりまして、大変感謝を申し上げます。今年度は予算はないのですけれども、協議会の枠組みを活かしまして、各機関の取組や活動の情報を共有し、連携した推進、それから、事業体の参加を増やしていこうと、こういったような活動を行っております。

以上でございます。

○石田氏 ありがとうございます。

では、続きまして大内様、お願いいたします。

○大内氏 北洋銀行地域産業支援部の大内でございます。

北海道新幹線の開業に伴いまして、平成25年4月に青函産業振興室を立ち上げ、函館に駐在しております。函館中央支店勤務を含めると、今年で5年目を迎えております。

当室では、地域を特化して、地域振興に資する事業を専門に取り組んでおります。

新幹線開業を見据えた道南と青森の食と観光のプロモーション、モニターツアー、ビジネスマッチング、商談会、ファンドなど、当行のソリューションを活用しつつ、機運醸成に取り組む一方で、まちづくりというものに銀行としても少しばかりかかわらせていただいております。

お隣にいらっしゃる函館地域産業振興財団の猪飼専務からもお話がありましたが、財団さんの資料を使わせていただいて大変失礼しますが、財団さんの3ページの(6)、今御説明をいただいておりますが、道南食と観光クラスター型6次産業化推進協議会の設立に至るまでには、地域にあったら良いもの、地域に足りないのではと思えること、それらを補うにはどういう取組が必要か、そういった視点で、地域の関係者の方々と話をさせていただき、確認をしながら、意見を集約するというプロセスを経ていきます。

この協議会の設立で集まりました関係者の方々とプラットフォームを作ったことがきっかけで、各所から地域振興にかかわるお話をいただく機会が増えまして、お話をさせていただく中で、目的が同じ方向かなと思われる事案については、連携してはどうでしょうかというお話をさせていただきながら、労力と費用と時間の効率化等、お互いの強みと弱みを補填しながら、地域事業者の方々に対するサポート体制の強化を図っています。

具体的な例としましては、今年の2月に開催しました産学官金連携セミナーになるので

すが、こちらは函館開発建設部様と北海道大学観光学高等研究センター様、北海道教育大学函館校様、それから、北海道中小企業家同友会函館支部様の各々の事業を一つにまとめたセミナーを実施いたしました。「住みたい、訪れたい南北海道にしよう、これから何をすべきか」というテーマのもと、道南の食、観光、ものづくり、事業者の皆様、170名ほどお集まりいただきセミナーを開催いたしました。同じ道南地域にしながら、接点のなかった自治体、関係機関、事業者、生産者さんの方々が一堂に会することで、新たなネットワークが生まれるきっかけになったのかなというふうに思っております。

ただ、あくまでもセミナーやイベントはきっかけであり、取っかかりというふうに捉えておりまして、このセミナーの開催で終わるのでは意味がないというふうに捉えておりまして、当行を含めて、プラットフォームを形づくる構成メンバーが、テーマに応じて体制を柔軟かつスピーディに立ち上げて、最適なソリューションを提供して、地域事業者の方々の事業の発展につなげていけるように、ゆるやかな連携の持続に向けて知恵を出し合い、ブラッシュアップさせていけるように取り組んでまいりたいと思っております。

以上でございます。

○石田氏 ありがとうございます。

それでは、続きまして谷様、お願いいたします。

○谷氏 北斗市で体験観光をしております谷と申します。よろしく願いいたします。

当農場の取組を、資料4を見ながら、簡単ですが御紹介させていただきたいと思っております。

当農場は、函館市から車で約20分、約1万5,000坪という敷地の中で、旬の果物や野菜が実り、さまざまな収穫体験が楽しめます。春はイチゴ狩りから始まり、6月中旬から約400坪の敷地に、景観が美しいロケーションの中でイチゴ狩りが楽しめます。お客様からは大変好評をいただいております。土日祝日には2時間ほどで終了してしまうほどの人気です。イチゴ狩りは、1日最大300名様以上の団体の予約も可能になっており、その日は貸し切りになります。毎年、土日にはイチゴ狩りに入れないお客様もいますので、大変御不便をおかけしている状態です。7月にはサクランボ狩りが始まります。佐藤錦や南陽といった様々な種類のサクランボが楽しめます。現在は野菜の収穫体験を、近隣のホテルと提携いたしまして、収穫体験と焼き肉セットプランを御用意しております。自分たちで収穫した野菜を自分たちで調理して食べるという体験プランです。今後は、ブルーベリーやブドウ、ジャガイモ掘りまで、家族で楽しめる収穫体験、そして、併設されている直売所では、各種の果物、野菜の販売や、採ってすぐその場で食べるという産地直食体験も可能になっております。農場内でとれた野菜を使って軽食も提供しております。2006年には、お客様の御要望もありまして、農場内で収穫した野菜などをゆでて食べるふれあいファームレストランを敷地内にオープンいたしました。ここでは、農場内でとれた野菜をふんだんに使って軽食を提供しております。体験後の休憩、ジュースづくりやサラダづくりの教室も行っております。女性にも人気の高いスムージーは、当農場でとれた果

物を使い、四季折々に収穫した果物や野菜をふんだんに使っております。その時期にしか味わえないスムージーも提供しております。

今後も農業と観光を柱に、楽しくておいしい体験、感動が出来る体験を皆様に提供していきたいと思っております。

○石田氏 ありがとうございます。

それでは、次に中野様、お願いいたします。

○中野氏 五稜郭タワーの中野でございます。

本日のお手元の資料には、肩書きとしてもう一つ、箱館会会長というふうになっておりますが、箱館会という会、皆さん御存じないと思うのですが、観光関連事業者の組織で、平成4年に設立して、もう23年目の実務者レベルの観光事業者の組織でございます。

今日、お手元の資料5をお配りさせていただきましたが、これにつきましては、直接、箱館会ということではなくて、昨年、五稜郭築造150年の年でありましたので、こちらは民間主導で実行委員会組織を立ち上げて実施しました事業報告書ということで、こちらにお配りしております。この組織、実行委員会につきましては、新都心五稜郭協議会という会があるのですが、そちらが中心になりまして、商工会議所や観光コンベンション協会、その他青年5団体含めまして、各団体に御協力要請をして、実行委員会を立ち上げました。

こちらを中心にお話ししたいのですが、まずは色々と事業を計画していく中で、私がこの実行委員会の事務局長でしたが、全体的なプロデュースを私が行いました。軸に置いたのは、いかに五稜郭築造150年ということを表に向かって発信出来るかということで、1日の記念イベント程度ではなかなか発信ができないということで、なるべく長期にわたってということをまず企画しまして、お手元の資料、めくっていただくと、記念式典、その他、記念イベントの日程は6月15日ということで1日限りなのですが、イベントを開催しています。そのときに、南北北海道の伝統芸能とか、グルメも集めたり、ギネスにチャレンジということも同時に開催しまして、盛り上げています。それと同時に、コスプレフェスティバルというのを、若干、実証実験を兼ねてやっています。それと同時に、ゴールデンウィークから10月19日までにかけてまして、五稜郭を使ってのおもてなし隊というのを編成しました。このおもてなし隊は2種類あって、幕末見廻隊という、観光客の方などと記念写真を撮るという目的のものです。こちらは土日祝日、4月26日から10月19日の間で、全部で58回実施しています。それと、お隣の箱館戦争抜刀隊です。これは函館五稜郭祭でも行っています殺陣チームに依頼して、同じ4月26日から10月19日の限定日だけですけれども、全部で18日間、殺陣を披露しております。やはり観光面での発信としては、ワンシーズンを通してとか、そういう形で盛り上げていく必要性を感じていたものですから、こういう形でやらせていただきました。本来であれば、4月26日から10月19日まで、毎日やればいいのでしょうけれども、色々それは出来なくて、土日祝日になっています。

それと、もう一つが、歴史の群像展として、後ろから2ページ目のところなのですが、函館リトファスゾイレ、HISTORIA HAKODADIというのをプロデュースしています。こちらについては、歴史群像展なのですけれども、円筒形のボイド管というのを使って、市内各所、17カ所に30基のリトファスゾイレを設置しています。目的は、やはり函館の歴史、幕末から明治にかけての歴史を振り返る企画なのですが、人物にスポットを当てて、やはり函館の歴史を、ストーリー、物語を伝えたいということでの企画です。

こういう形で150年祭を実施しましたが、今後の方向性としては、やはりおもてなし隊についても実証実験的に長期間にわたってやりましたし、リトファスゾイレについても、現状、道南全体で散りばめて企画を構想して、今動いているところなのですが、まだ予算がつか分らないのですけれども、やっています。

あと、おもてなし隊については、新幹線開業に向けて、今、函館市の方でも何かしら似たような企画を御用意するみたいな話も聞いていますし、何よりも、やはりこの企画で一番感じたのは、色々な団体の協力を得て、民間主導で進めたのですが、やはり同じ函館市内の色々な方々の協力を得なければできない企画でしたので、そういうことを、やはり今後も地域内での連携というのは非常に重要だなということで思った次第です。

以上でよろしいでしょうか。ありがとうございます。

○石田氏 ありがとうございます。

では次、服部様、お願いいたします。

○服部氏 八雲町で味噌、醤油を製造しております服部醸造の服部と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、服部家のマルハチという商標について、少し御説明させていただきます。

服部家は旧尾張藩士、ほかの藩士とともに八雲に移り住みました。明治16年に徳川家が、自給自足、地域住民の食の安定のために、徳川家の農場において味噌、醤油の製造に着手し、尾張八郡の象徴とする尾張藩の印、マルハチを創業の商標と定め、発売いたしました。マルハチはその後、名古屋の市章ともされています。

昭和2年ごろより、服部家において製造を始めるに当たり、曾祖父伝次、徳川義親氏とことのほかの御親交にあずかり、服部醸造の創業に当たり、徳川家所有のマルハチの商標を下賜せられ、服部醸造が受け継ぎ、今日に及んでおります。

当社の味噌の特徴でございますが、八雲町は気候的な特徴としまして、霧が発生する日数が多いことが特徴で、湿気がとても多く、湿った環境を好む菌にとっては繁殖しやすく、麹菌、酵母などの微生物の力によって発酵、熟成が進みやすく、味噌、醤油づくりには適した環境になります。

また、八雲町では、良質でクリーンな海洋深層水を取水、供給するための海洋深層水取水施設を整備しております。太平洋側の海洋深層水に比べ、特に水温が低く安定しており、ミネラル分が多く、栄養素が豊富で、不純物の少ないのが特徴でございます。

当社のお味噌には全てこの海洋深層水を入れており、酵母の働きが活発になり、これぞ服部の味噌を作ることができます。

自社製品を少し御紹介させていただきます、道南の方にとっても人気のあるOK味噌シリーズ、これは90年間、とても愛されている商品です。また徳川家に献上しております舞シリーズ、こちらは北海道の原料を全て使い、葵の御紋を載せて発売しております。葵の御紋をのせて発売するにあたり徳川家より証明書が必要で、当社はこの証明書を持っております。

また、2016年の新幹線開業を記念し、青森のニンニクとコラボレーションをし、ニンニク醤油を作っております。この商品は3年前に発売したのですが、最近とても人気があり、お問い合わせがかなり多くなっております。

また農商工連携認定商品、新たに服部醸造を代表するお味噌とし、オール八雲味噌というものがございます。こちらは平成17年に旧八雲町と旧熊石町が合併したことによって作ることができ、大豆は旧八雲町のものを使用しております。また旧熊石町のお米と海洋深層水を使用し全て八雲のものだけで作ることでできたお味噌を発売しております。八雲町ではなかなか原料がとれないもので、製造量が少量の為、八雲町に行かなければ買えない、プレミアム味噌となっております。熟成期間も長い為予約待ちの状態でございます。

私としての活動でございますが、2年ほど前から海外にて味噌、醤油を販売しております。去年はシンガポール、今年はマレーシアに行き、直接試食販売を行っております。先ほど御案内させていただいた舞の味噌と舞の醤油に関しましては、3日間ほどで50個販売しております。あまーい醤油は3日間で100本ほど売れております。海外では、味噌、醤油はとても興味を持っており、日本の食＝発酵食品とっていただいている部分もたくさんあります。

しかし、私が海外に行って販売をするだけではなく、是非八雲町というまちにも、これから海外の方に来ていただきたいという思いがございます。海外では八雲町というまちの説明を行い、北海道のどの部分にあるというのも説明をしております。—その話を聞き少しでも海外の方に興味を持って頂き北海道にお越し頂きたい思いで、宣伝もしております。

また、最近ではお子様がなかなか味噌汁を食べていただけないという現状がございます。小学校へ授業に行ったところ、「朝食で味噌汁を食べて来た?」と質問をすると、半分以下でした。そのぐらい、朝食を食べない習慣になっているのかもしれませんが。食育ということも兼ね、弊社では味噌づくり体験を行っております。児童会館に行ったり、小学校に行ったり、中学校に行ったり。自分たちの手で味噌を作ってください、その後、弊社にて3カ月間、味噌を発酵させます。3カ月後に自分が造った味噌を食べると、とても感動して「お味噌って美味しいね」という言葉を言ってくれたお子さんもおりました。体験をした方がファンになって下さり、スーパーに行き服部の味噌が売っていると買ってくれる方もいらっしゃいます。それを求めているわけではないですが。もっと発酵食品を分

かっていただきたいということで、このような活動を行っております。

最後に直売所を今年オープン致しました。敷地内にある自宅の1階を改装いたしました。は是非いらしていただければと思っています。

このような活動を通しまして、これからも八雲町に若者が帰れる町を望み、若い方々がもっと味噌、醤油を食べていただける環境を作るのも私たちの役目ではないかと思っております。今後も色々な活動を続けていきたいと思っております。

○石田氏 どうもありがとうございました。

最後になりましたけれども、室谷様、お願いしたいと思えます。

○室谷氏 皆様こんにちは。江差町から参りました室谷と申します。

資料7-1、それから資料7-2というのがございます。さすが北海道開発局さん、データを送りましたら立派に製本していただいて、感謝しております。

私たちは、平成元年に、実は北海道の戦略プロジェクト、歴史を活かすまちづくりというのがありまして、平成4年から任意の組合を作って、ずっと活動してきました。既に四半世紀になろうとしております。

ということで、ここで自己紹介させていただきますけれども、昔は、電話が来て、室谷さんはどんな字を書きますかと言われたときに、室の谷で室谷で、元気な男と書いて元男というふうに紹介させていただいたのですけれども、四半世紀たちましたので、「もとおとこ」と書いて元男と読みますと、こんなことを言ったりしています。

活動の拠点は、実は今年、平成26年度、国土交通省の手づくり郷土賞というのをいただきまして、岡部局長さんにも来ていただいて、見ていただいて、足りないところは、あとは国交省が何とかするからと、そういうふうになればいいなというふうに思っ話をさせていただきました。

ということで、1.1キロの街区を、もともと7メートルの道路に、3メートル、3メートルの歩道をつけまして、街路事業、13メートルの道路にして、1.1キロを、電線も地中化した中で、古さを活かしながら新しいまちづくりをしようということで取り組んできました。商店街の取組なのですけれども、商店街といっても小さな商店しかないので、やっぱりまちづくりという観点から進めなければならないということで、せっかく道路が新しくなってくるので、大体150軒くらいのお店、あるいは住宅、事業所があるのですけれども、そこから一人一人の人が、自分の家、あるいはまちのことを語ると、100人の語り部が出来るのではないかと。せっかくまち並みが新しくなって、大きなバスで来て、美人のガイドさんが来てまちなかを案内するのではなくて、一人一人が車で来るような人たちとちゃんと語らいが出来る、一人一人の住民が主人公になれるような取組をしたいということで、100人の語り部のまちにしようという仮説を立てまして、ずっと取り組んでいます。

写真集がございますので、見ていただけると分かると思えますけれども、5月は、江差追分の名人がたくさんいるので、その人たちが長持唄、あるいは江差追分を歌いながら、

このいにしえ街道を人力車に乗って、古いお寺から、真ん中にある姥神大神宮まで来て挙式を挙げるといふ花嫁行列、いにしえ街道を使ってやっています。また、冬の時期は何もないものですから、2月から3月いっぱいくらい、全国から170組のお雛様をいただきました。たくさんのお雛様も飾りながら、北前のひな語りという名前にしました。不要になったお雛様をくださいと言ったらたくさんくれたので、くれた方にお手紙を出して、あなたからいただいたお雛様は江差町のこの街区のこんなところに飾ってありますので見てくださいというふうにお手紙を書くと、函館からたくさん来てくれます。要するにお雛様が里親みたいな感じで交流が出来るような仕組みができればいいなど。

それから、全国の半島の交流を通じて、今、青森県の五所川原を中心に、半島の交流もしています。そんな中で、写真にもあるとおり、ねぷた師を呼んで、江差らしい行灯の文化というものを作ったりしています。これからは、津軽海峡圏を一つとして、この間も札幌で会議があって、お話を聞いたのですけれども、どうも江差、特に道南地方は、北海道といいながら、やっぱり文化、それから歴史的なつながりが東北の方に近いので、よりそういう交流の場になるようにしていければいいなど、そんな取組をしているところです。

とりあえずこんなことで、よろしくお願ひします。

○石田氏 短くかつ的確に自己紹介と活動について御説明いただきましてありがとうございます。

4. 国土交通省北海道局説明

○石田氏 冒頭、岡部局長からございましたように、我々、今、8期の基本計画、総合開発計画を策定中のございまして、それについての御意見と御期待等をこれから承っていくわけがございますけれども、まずその前に、どんなものかということ事務局から御説明いただければと思いますが、お願ひします。

○鎌田参事官 北海道局参事官をしております鎌田です。

私の方から、いただいた時間は15分ぐらいということになっているのですが、今お話しいただいた皆さんの内容に比べると、ちょっとかなり堅い内容になるかもしれませんので、できるだけコンパクトに御説明をしたいなというふうに思っておりますが、しばらくお付き合いをいただければと思います。

資料は、お手元の資料2-1、これを使って説明しますが、新たな北海道総合開発計画中間整理といいますのは、資料2-2、ページ数で42ページありまして、ここに絵もグラフも何もない、文章といいますか、箇条書きのものになるのですけれども、こちらが、今日、座長をしていただいております石田先生や谷口先生を初め19人の学識経験者の方に議論していただいて、2月から7月まで、6カ月で5回、ですから概ね1カ月に1回のハイペースで議論していただいたものを事務局の方で整理して、色々皆さんに御意見いただきながらまとめたものです。

この概要を、もう一つのA4横長の資料2-1を使いまして、私の方で説明をさせてい

ただこうと思っております。

1枚めくっていただきまして、資料2-1の1ページ、こちらでは新たな北海道総合開発計画の中間整理のポイントというのが書いております。

左側に現状ということで、これはどちらかというと北海道の強みの部分を書いております。

一つ目は、何と言いましても、面積も広いというのもあると思うのですが、北海道は日本の食料供給基地になっております。

主な農水産物ということで、下に書いてありますけれども、ホタテ貝、バレイショ、生乳。特に生乳につきましては、全国の52%ということは、飲む牛乳の方ですけども、日本の半分以上の方が北海道の牛乳を飲んでいるというふうに受け取ることができます。

そしてその下に、食の輸出、外国人観光客が急増していますよというのが書いてありますが、食の輸出の方では、日本全体も伸びているのですが、日本全体が同じ期間で1.5倍ぐらいなのが、北海道では2.5倍に伸びていると。

それから、外国人の旅客者数も、これも最近、よくニュースになっていると思いますが、これも同じ期間でいいますと、全国では3倍ぐらいなのですけども、北海道は5倍になっていると。私も今朝、函館の方に来たのですが、かなりやっぱり中国語とか英語を話される方がいて、データどおりなのだなというふうな感じがしたところでございます。

食の輸出でいうと、特にホタテの輸出と下に書いてありますが、オホーツク、あるいはこの噴火湾あたりからも多いのですけれども、これまでは冷凍品とか、今でもそういうのがメインではあるのですけれども、最近ではアジアの地域が経済的に発展したということや、輸送技術、あるいはここにあるような高度な衛生管理、あるいは交通の利便性とか、そういうのが向上したこともあって、生食での輸出が徐々に増えてきているというのが特徴かと思えます。

ただ、一方、右側が課題になるのですけれども、こちらは、もう皆さんも既に御存じかと思いますが、日本全国が人口減少、高齢化ということが課題になっているのですけれども、その中でも北海道は、下のグラフを見ていただきますと、赤が北海道、青が全国です。人口は北海道は既に平成9年にピークを打っています。全国は平成20年ですので、10年早く北海道はピークを打って、もう減少期に入っていると。現在、540万人と言われているのですが、既に30万人以上が減少しているということです。

それから、同じく高齢化につきましても、北海道の方が以前は高齢化率が低かったのですが、最近、急激に高齢化率が増大してきてまして、これも全国よりも10年先に行っていると。もう近々、北海道は30%に達するような状況になっております。

それから、その下は、これは本州の方向けに書いてあるのですけれども、北海道の広さということで、北海道の地図を本州に重ねたものです。今日は函館ですので、函館と札幌は直線距離は多分そんなに遠くないと思うのですけれども、鉄道や車で行こうとしたら、大体250キロとか300キロ以上あろうかと思えます。その距離というのは、東京から

スタートすると、ほぼ愛知県に入ってしまうぐらい、あるいは仙台の手前ぐらい、新潟の近くまでというような状況ですので、いかに北海道というのが本州に比べて広いか、それと、広い中に分散して住んでいるかというのがお分かりいただけるのではないかと思います。ことで良く使っている図になります。

こういったことを踏まえて、下の段のオレンジの左側になるのですけれども、戦略的に何に取り組むかというのが書いてありまして、一つは食料を中心とした食のことで、それと観光、この二つを戦略的な産業にしていきたいと思います。中でも、国内はもちろんなのですが、アジアを中心とした世界の市場を狙えるような産業にしていくべきではないかということが議論されております。

では、その食料とか観光のメインの場所、函館の場合は観光地として都市型の観光地だとは思いますが、北海道内全体を見回しますと、そういう第1次産業も、いわゆる農山漁村でやられておりますし、観光、例えば北海道の雄大な景色ですとか、あるいは知床とか釧路湿原などをイメージしていただきますと、いずれもここに書いたような生産空間という、第1次産業が営まれている地域が主体となっている。ではそういう場所というのは、人口減少の面でも非常に厳しい局面にさらされておりますので、その生産拠点をしっかり支えていくということによって、世界の北海道というのが目指せるのではないかと思います。

右の方につきましては、後ろのページで説明しますので、次のページを見ていただきたいと思えます。2ページ目になりますけれども、これが全体の構成ということになります。目次ですので、赤いところだけポイントで見ますと、右の上の第3節と書いてある、生産空間というのが大事ですよということと、それも非常にこのままですと、人口減少の面からいうと、生き残りをかけたこれからの10年になりますということ。

それから、真ん中の方では、世界の北海道を目指して、2050年を見据えた世界水準の価値創造空間にしていくというビジョンを掲げております。

その下の第3章というところの施策の基本的な考え方では、一つとしては、人口は減少していくのですけれども、そういった中だからこそ、逆に人、ここに集まっていたいただいている皆さんがまさにそうなのですけれども、人づくりが大事でしょうということで、人こそが資源だということを訴えております。

そして、先ほども申し上げましたような、生産空間を支えていくということが大事だろうということでございます。

では具体的に何をやっていくかというのを、もう1枚めくっていただいて、3ページ目で図などを使いながら説明をさせていただこうと思っております。

柱が三つありまして、その1番目が、人が輝く地域社会の形成ということで、この下の図は、先ほどから申し上げています、北海道型の地域構造といいますか、本州とは分散して住んでいる状況が違いますので、この図は函館ではなくてオホーツクをイメージして描いてありますので、ちょっと函館とは少し食い違うところがあるかもしれませんけれど

も、北海道の地域構造のイメージは、一つは、先ほど言いました生産空間というのが緑色で示していますけれども、第1次産業や観光を担っているエリア。その拠点、拠点には、地方部の市街地、数千人規模の市街地を想定していただけるといいのですが、そういったところには日常の生活機能を満たすエリア、それから、赤で描いてありますけれども、圏域中心都市ということで、人口3万人から十数万人ということになるかと思えますけれども、2次医療、例えば入院施設が整っていると、高度な教育ですとか、社会福祉施設でも高度なものが整っているエリアとして、圏域の中心都市というのがあるでしょう。そして、今、北海道でいうと、札幌圏あたりが一人勝ちとよく言われていますけれども、これからの北海道を考えていくと、各地方にこういうエリアが、多分、北海道で二十幾つぐらいあるのではないかといいふうに想定していますけれども、各エリアが中心都市ですとか市街地、あるいは生産空間、生産空間に引き続き人が生き生きとして暮らしていくためには、市街地や圏域中心都市が持つ機能を維持、あるいは強化していくことが重要だということを中心整理の方でまとめております。

その一つとして、その下に、北海道の価値創造力の強化というのが掲げてありますが、今日ここで集まっていただいているようなパートナーシップ活動、これを計画の策定から、来年以降も引き続き続けていこうということを考えております。

右の上の方に移りますと、2番目の柱として、世界に目を向けた産業の振興ということで、一つ目は、農林水産業・食関連産業の振興ということです。この農業のイメージも、ちょっと道東の方をイメージしているようなものになっておりますけれども、一つは、大区画化による省力化、あるいはIT農業による省力化、そういったものによって高齢化とか就業者の減少に対応していこうということ。

それから、食の総合拠点づくりというのは、北海道はいいものがたくさんとれるのだけれども、その材料が、材料のまま食材として移出されて、それに付加価値がついて北海道にまた戻ってくるということがよく言われておりますので、北海道に、生産地に食品加工場を誘致することによって、雇用も増やすというようなことで定住がより促進されるのではないかといいような考え方です。

右側の世界水準の観光地の形成は、これからの10年の間に、来年の北海道新幹線の開業ですとか、東京オリンピックなどがありますので、それに向けた魅力ある観光地づくりを進めていくということの一つの課題として、旅行需要の平準化。二つあるのですが、一つは季節の変動です。北海道の場合は夏と冬に偏りが少し見られるということ。それから、地域でいうと、宿泊は函館も多いと思うのですが、道央圏、あるいはせいぜい上川ぐらいで、道東の方は非常に宿泊客は多くないという状況ですので、こういった二つ平準化を目指すための取組をやっていきたいというふうに考えております。

その下、強靱で持続可能な国土の形成が3本目の柱になりますが、左側は、北海道は風力とか太陽光発電、あるいは地熱などの賦存量が非常にたくさんありますので、その場合の余剰電力を利用して、それを水素に加工することによって、地産地消型のエネルギー循

環を作れないかというようなプラットフォームを今年立ち上げまして、既に活動を始めているところです。

右側の安全・安心につきましては、昨年、北海道でも大雨が降ったり、暴風雪が道東の方であったりというのがありましたけれども、特に暴風雪と高潮のような複合災害に対する対応もきちんととっていかなければいけないということでございます。

それから、残り、4ページ、5ページですけれども、これは今日お集まりいただいたものと同じで、来年以降も、ここに北海道価値創造パートナーシップというのが書いてありますが、これも展開していこうと思っています。それ以外にも、今申しあげました食の総合拠点づくりですとか、水素の地域づくりの問題、平準化のための外国人ドライブ観光などを推進するためのプラットフォームを全道で、それから、道内各地でもそれぞれの地域に合ったようなプラットフォームを作っていこうというふうに考えております。

最後の5ページ目ですけれども、これは計画自体が来年の28年度から37年度までの10年間ということになっておりますので、今年だけで終わるとか、1年で終わるとかいうことではなくて、計画期間中、道内、あるいは全道のプラットフォームについては進めていって、見直しながら、道内の人材育成に、北海道局、あるいは北海道開発局としても取り組んでいきたいというようなロードマップになっております。

ちょっと相当端折ってしまいましたけれども、不足のところは、また質問や意見交換の中でやっていきたいと思っています。

以上でございます。

○石田氏 ありがとうございます。

5. 意見交換

○石田氏 それでは、今、新たな北海道総合開発計画の中間整理について御説明いただきました。

事前に中間整理という文章ばかりの黒々とした資料、お読みいただいているかと思えますけれども、それをもとに、皆様方からの、中間整理、あるいは、これは中間整理でございますので、計画はこうあってほしいとか、あるいは行政への期待に関して、忌憚のない御意見を頂戴したいと思います。

一通り伺いましてから、さらに突っ込んだ議論という形になっていけばいいなというふうに思っておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、御出席の皆様から、まずただいま事務局から説明しました中間整理について、御意見をいただきたいと思えます。

今回はちょっと長目で、1人7分ぐらいということですが、7分なんていってもわからないので、大体でいいですので、よろしく願いします。

先ほどとは逆の順番で、今回は室谷様、服部様という、逆五十音順で進んでまいりたいと思えますので、室谷様からお願いしたいと思います。

○室谷氏 先ほど自己紹介の中で、ちょっと言い足りない部分等ありましたので、それを含めながらお話しさせていただきたいのですけれども、私たちの活動の、今、主たるところは、全国の半島の関係するところとの交流、それから、特に津軽海峡圏を挟んだ下北、そして津軽半島、それから江差も含めて渡島半島間の交流ということを中心に、活動をずっとしてきているわけなのです。半島振興法の中で、全国23の半島は、やっぱりどうしてもインフラ的には遅れてきたということが半島振興法の主たる主題だったと思うのですけれども、しかしながら、半島にこそ日本らしいいいものが残っているということを見ると、やっぱり半島のよさというものをもう1回、新幹線の時代に、新しい時代にアピールしていく必要があるのではないのかなと。それこそ新幹線が結んだ日本のあるべき姿みたいなものを半島に求めていくべきところで、私たちは声を上げていくべきではないかということで活動をしています。

ということで考えたときに、こういう計画を見ると、どうしても、先ほど4ページの方などがそうですけれども、道東がベースで、こんなイメージというのが出てくるのですけれども、これはまさしく北海道のイメージかなと。道東、あるいは道央のイメージで見るとこうなると。でも、例えば函館だとか道南圏を考えたときに、やっぱり津軽海峡というものを抜きにして考えられないのではないかなという気がするのです。ですから、開発局の方も、是非とも道南圏、あるいは津軽海峡圏と一つにした中で、圏として、エリアとしての開発計画を立てていただきたいということ。

それからもう一つ、新幹線絡みもそうですけれども、やっぱり津軽海峡の青函トンネルができたときは、それなりに色々な思いがあって海峡ができてきたと、そんな思いがあったと思うのです。新幹線も多分そういう思いが皆さんあると思うのですけれども、翻って見ると、私たち、昔から歴史を紐解いてみますと、北前船の行き来していた時代の方が、より津軽の人たち、あるいは日本海の人たちとの交流があったはずなのですよね。昔の方が交流があったのに、交通アクセスが進んでくることによって、何かそれが途切れてしまったということを経験したときに、やっぱり大動脈たる新幹線が来るときに、枝になる部分を、道路だとか、それから2次交通の部分でも整備しながら、ただ単に時間距離を短くするというのではなくて、人の交流を密にするための、そんな開発のあり方といいますか、そんなことを是非取り入れてほしいなというふうに思いました。

以上です。

○石田氏 ありがとうございます。

津軽海峡圏、道南のイメージということと、新幹線を契機にした2次交通、高速道路、本当にシームレスな交通ということだと思いますけれども、ありがとうございます。

では服部様、お願いいたします。

○服部氏 1枚目、これからの北海道の戦略の中で、食と観光という箇所について、弊社におきましても、食と観光についてはこれから一番力を入れて行きたいと思っております。海外へ行くと、北海道とつくだけで色々な商品が売れます。しかし、海外では売れて

も日本では、北海道物産展を行っても北海道というだけではだんだん売れなくなってきております。そこで、私はどうしたらいいのかというのを、北海道庁様が主催しているフード塾を修了し、自社の柱となるものを造るということを知りました。現在弊社ではこの柱となる商品は何か？と日々商品開発をしております。観光についても北海道には美味しいものが沢山ある、夜景が綺麗だから北海道に来てくださいというだけではインパクトは薄いのではないかな？と思っております。

食を通し、沢山の方とお仕事をさせていただいておりますが、北海道の企業の方は自社ブランドを大切に商品開発、販売を行っております。これだけの素晴らしい食材や自然がありますので、食だけ観光だけでは無く、食と観光と一緒に結びつけて各地域が盛り上がっていきたいです。

○石田氏 ありがとうございます。

そうですね、東京のデパートでも北海道物産展をやっておられますけれども、やっぱりいまだにカニのイメージが強過ぎますよね。そういうところをどう払拭していくかという、大事な御指摘だと思いました。ありがとうございます。

続きまして中野様、お願いします。

○中野氏 私の方からは、観光面、仕事柄、観光の会社をやっていますので、日ごろ非常に感じているところでいいますと、先ほども出ていましたが、北海道は非常に広過ぎること。観光の分野でも、函館というか、道南だけちょっと異質で、歴史・文化が深かったり、他の広大な大地北海道というようなイメージとちょっと違うような部分があるとは思っています。

それともう一つは、北海道は広いということで、今、地方創生とか、色々地方の疲弊をどう食いとめるかということが社会問題になっていますけれども、東京から見れば北海道は地方なのですが、北海道の中の問題としては、やはり札幌が一極集中で、非常に道南の疲弊がどんどん加速化がしているという部分が非常に気になっているところなのです。ですので、開発局さんとしても、北海道全体をどう活性化するかというのは非常に難しいと思うのですけれども、地方こそ、道東とか道北も厳しいと思いますけれども、そういう地域に目を向けて、何とか進めていただきたいというところなのです。

観光面については、ブランド力というのが非常に重要になると思います。道南地域で18市町ありますが、函館はやはりピカイチというか、魅力的なまち、昨年、ブランド総合研究所というところのアンケートで日本一になるぐらい、有名な代表する観光地になっています。ただ、それを道南地域、南北海道にどう周遊させるかという工夫はまだまだ足りないのですが、色々取組をした経緯でいいますと、やはりブランド力が難しい。今のところ足りない。もちろん松前、江差、七飯、大沼あたりはそこそこ知名度も上がってきていますけれども、その他の地域にどう観光客を運ぶかという、やはりブランド力になると思います。そこに明確な形で何か開発局さんとして協力いただければなと思っています。

例えばですけれども、我々がもし九州へ行くとすれば、やはり知っている地名、福岡、

熊本、鹿児島とか、そういうところにまず行ってしまおうと思うのですけれども、北海道の場合、やはり函館、小樽、札幌、その観光地がこの30年来のゴールデンルートと言われているところなのです。やはり北海道へ行くのであれば、2泊3日、3泊4日であれば、函館、小樽、札幌というのがもう定番になっているのですけれども、そこをどう打破していくかというか、北海道としてやっていかなければいけないという課題があると思います。それほどブランド力が重要なのですが、なかなかそこが簡単ではなくて、我々も手をこまねいているところではございます。

それと、先ほど計画の中にありました、観光の面では、まずシーズン、オンシーズン、オフシーズンの平準化ということと、道東とか道北、道南とかの地域性の平準化ということをお話しされていましたが、この部分も非常に重要なところだと思っています。まさしく北海道観光というのは、4月から大体10月ぐらいまでがシーズンで、その以降、11月から3月というのはやはり閑散期になってしまうという経緯がありまして、現状は、冬場は東南アジア、雪のない国の方たち、外国人を招くことで何とかしのいでいるという部分がありますけれども、何とかそこも平準化を進めるべきではないかなと、お願いしたいなと思います。

それともう一つは、観光面においては、現状は人口減少から国内の旅行者が、全国的だと思えますけれども、非常に観光客が減っていると。それをカバーする部分での外国人観光客ということをおっしゃっていますが、一方で、やはり日本人の国内の観光客の誘致ももっともっと力を入れていかなければいけないのかなということも、最近、非常に逆に感じています。海外の情勢とか政治の部分とか、そういう部分、いつ何時というのもありますので、やはり現状では、まだ北海道の観光でいうと9割くらいは国内の日本人の入り込みで維持されているのです。ですので、そこも手を抜かないように進めていただきたいなという部分でございます。多分、国内旅行の日本人観光客が訪れるまちには、必然的に外国人も訪れていただけるとは思いますので、まずはやはり改めて日本人をもっともっと北海道に呼んでいただきたいなというふうに思います。

以上でよろしいでしょうか。

○石田氏 ありがとうございます。

そうですね。函館がブランド力ではということだったのですけれども、八雲町としてはいかがですか。さっきプレゼンの中で、日本で唯一、日本海と太平洋があるまちと、すばらしいキャッチコピーだなと思ったのですけれども、何か反論みたいなものがありましたらお願いしたいと思いますが。

○服部氏 八雲町は二つの海を持っていますので、採れないものはないのではないかなというぐらい、食に溢れています。その面では八雲も負けないと思います。環境がとてもしい町ですので、沢山の海外の方もお越しいただいております。朝日と夕日が見える町。このようなキャッチコピーを活かしたまちづくりが出来るのではないかなと思っています。

○石田氏 ありがとうございます。すみません、突然振りまして。

では谷さん、お願いいたします。

○谷氏 私の分野でお話し出来ることといたしましては、農業と観光というテーマでお話しさせていただきたいと思っております。

中間整理の第3章、北海道の価値創造力の強化とありますが、価値を生み出す力ということで、今の社会全体を見ると、お金があれば何でも出来るというような豊かさや便利さを追い求め過ぎてしまって、豊かで便利な今の生活は本当の価値を失っているのではないかなと思っております。お金のある豊かさから心の豊かさへ、今本当に求められているのは、価値と創造力ではないかなと私は思っております。そして、観光、農業においても、これらを実践する力がとても必要ではないかなと思っております。

第4章の2節にあります、地域資源を活用した農山漁村の活性化についてというのがありますが、これはちょっと当農場の方がよく当てはまるのではないかなと思っております。自分たちの取組も含めて、織りませながらちょっとお話しさせていただければと思います。

北海道の大多数の集落が第1次産業と記されていますが、もともと私たちも農家でありました。今でも農家なのですが、なぜ普通の一般の農家が観光農園にまで発展したかということなのです。それは、初めの気づきがとても重要で、価値と創造と実践がやはりキーワードではないのかなと勝手に結びつけておりますが、私の義理の父が現在の当農場長ですが、当時、自宅に八郎沼公園ときじひき高原の間に自宅と農場がありまして、昔から自宅前で、農家ですから、野菜の販売をしてきたのです。それで、毎度行き交う車を目にして、この地にたくさんの方が訪れる観光農園が自分たちで作れたらなという思いが、今の観光農園の出発点でありました。2000年には私たちの結婚も後押しになりまして、2002年ごろの当時の北海道でも、アグリビジネスのサクセスモデルというのがありまして、グリーンツーリズム制度で農家を支援する動きも始まっておりまして、この制度を活用したのも大きく成長するきっかけではなかったのかなと思っております。

直売所からイチゴ狩り、それから新しい土地の取得まで、色々さまざまな問題がありましたが、お客様のふれあいによって学んだことを実践する力、あとは、私が今持っている資格を取れたのも、家族の理解があつてのことです。野菜の販売中にお客様からいただいた声なのですが、この野菜は健康のどの部分にいいのだとか、体のどこの部分に効くのですかとかという質問がたくさんありまして、お客様との交流によって、ちょっと資格を取ろうかなと思いました。そして、体験観光をすることも、食の体験で感動させたいなという思いがありまして、お客様の新鮮でおいしいものが食べたいという気持ちと、畑の中で体験活動をさせるという形が合致しまして、体験観光というふうに成長できたのかなと思っております。

お客様自体は、単に農産物を持って帰るだけが楽しいわけではないのですね。やっぱり私たちが始めた体験観光というのは、ものだけではなく、自然に触れて、農産物や農業を通じて、生産者、私たちとふれあい、働くという実感ですね。ちょっと汗を流したりとい

う、そういうところに気づいて、ふれあいを求めるというのが、野菜の収穫と、野菜を持ち帰ると、体験というのが重なって、付加価値になっているのではないかなと思っております。

そして、私が住んでいる北斗市は、2006年に誕生したとても新しいまちなのですが、本当に自然豊かで、古くから農業と漁業を中心に発展してまいりました。私たちの農場の周りにも数軒、果樹園がありますし、地域での農業の取組も大分進んできております。市では、既存の観光資源の磨き上げや、他で行っていないような体験の観光の取組にも力を入れております。

でも、実際なのですが、一般の農家が体験観光を進めるというのはとても本当に大変な苦勞がありまして、例で言いますと、ハウスに行ってトマトを収穫するだけと皆さん思いがちなのですが、一般の農家さんというのは青いうちにトマトを出荷するのです。ここでいつ入るかわからない観光客のために、赤くならしたトマトをつけておくというのは、トマトの農家さんも生活がかかっていますから、そのためだけにはつけておけないのです。私たちはいつ来るかわからないお客様のために常に準備しておかなければならないので、出荷先を見つけて調整をしております。お客さんが来たときの対応も、一般のお客様なので、感動を求めに来ているのですが、普通の農家さんであればうまくしゃべれないだとか、無愛想だという、ちょっと問題もありまして、そういうところに来てくれる、サポートしてくれる人材の方も必要なのではないかなと私は思います。やっぱり感動するには、一番おいしい状態でお客様に喜んでいただきたいというのが本音でありますので、それを実においしい状態で提供するという見きわめを出来るスキルも必要になります。まして、価格の設定も市場と同じでいいのかだとか、高くはないのだろうか、さまざまな農業体験なのですが、一般の農家が体験観光をするというのは本当に大きな課題がたくさんあると思います。

それで、やはり人材の育成もそうなのですが、地域ぐるみで連携を図って、そういう農業体験をさせてあげたいだとか、そういう人材の発掘や育成、交流など、ふれあいの場もこれから作ることによって、地域の活性化にもつながるのではないかなと思っております。やっぱり地域の活性化という点では、誰に何をどのように提供していかなければならないのかということも念頭に置いて、これからの体験観光を進めていかなければならないのではないかなと、すみません、私個人の意見なのですが、そう思っております。

○石田氏 ありがとうございます。

資格を取られたとおっしゃいましたけれども、どういう資格ですか。

○谷氏 ベジフルビューティーセルフアドバイザーといいまして、野菜や果物、新鮮なものを作っておりますので、それをいかに効果的に体に入れて、美容と健康によいかというのを提案していく資格でございます。

○石田氏 そういうことを苦勞話を織りまぜて説明されると、お客様は感動されたりするわけですね。

○谷氏 そうですね。それも飛びつきますが、一番いいのは、やっぱり畑で新鮮な野菜や果物をジュースにして飲むと、本当に体の内側からきれいになれるのだという、その実感ですね。

○石田氏 ありがとうございます。

お待たせいたしました。大内様、お願いいたします。

○大内氏 私の方からは、青函産業振興室という部署自体が、新幹線の開業を見据えて設置した部署ということもありますので、私はそちらの方、北海道新幹線というところの観点から、中間整理の内容についてお話をさせていただきたいと思うのですが、北海道新幹線は北海道の新幹線の開業であるにもかかわらず、やはり道南地域におりますと、道南の新幹線開業というふうには、道内の皆さん自体がそんなふうには捉えていらっしゃるのではないかなというような気持ちを感じる機会が多くございます。北海道にとってとても本当に大きな大きなイベントであるものですから、もっとオール北海道でこの大きなイベントを迎えるのだということ認識しなければならないというふうにも思っておりますし、15年後でしょうか、札幌の延伸の方も決まっておりますので、そう考えますと、この中間整理の中に、北海道新幹線の文字がもう少し大きく出ていただいてもいいのかなというふうに思っておりました。

なぜ北海道新幹線が道内全域になかなか機運として盛り上がり欠けているのかというところは、皆さん周知のとおりかとは思いますが、北海道の道央圏から離れた道南ということもありますし、そのことによって、残念ながら地方紙の掲載いただける部分も非常に少ないというふうに感じております。ただし、地元の記者さんは本当によく、マメに取材をされていらっしゃるって、どの小さなイベントごとにも顔を出していただいて、丁寧に取材をしていただいているという現状はあるのですが、これを翻って道内というふうになりますと、非常に面積としては、ときには何の記事にもならないケースもこれまではありましたので、もしかすると道内全体が盛り上がり欠けてしまった要因としては、そういったところも考えられるのではないかなというふうに感じております。

それで、私の方としましては、色々地域で活動している中で、色々な方々とチームを組んで事業を立ち上げたりとかということをやっているのですが、必ずそこにはマスコミの方を、主催には入りませんが、企画を詰めていく段階であったりとか、企画が決まった後には必ず情報交換として報道関係の方との情報交換をマメにやっております。それは、もちろん掲載していただくということも目的としてはありますけれども、むしろそれよりも、やはり地元紙の方の持っている情報力であったり、やはり俯瞰したものの見方というのでしょうか、そういったところも実際に事業を進めていく上で、私どもとしては本当に参考となるアドバイスをいただくこともありますので、是非プラットフォームを各地域で組成していく動きを促していくに当たり、そういった産学官金言ですか、地方紙を巻き込んでというようなところも入れていただいたらいいのかなというふうに感じておりました。

以上でございます。

○石田氏 ありがとうございます。

やっぱり新幹線は非常に大きなイベントなので、もっと全面的に受けとめるべきであると。

○大内氏 そうですね。やはり今年開業しました金沢の開業の当日に、お仕事で行かせてもらっていたのですけれども、当日、駅の中も視察はしましたが、実は割と駅のイベントからはすぐに離れまして、ホテルに戻ってテレビの報道をチェックしてみました。やっぱりどのチャンネルに変わっても、当然ながら金沢新幹線と富山の新幹線の報道をずっとやっておりまして、やはり新幹線の開業日の模様というのは全国に報道されるわけなので、すごくとてもいいプロモーションの機会になるわけで、そのほんの一瞬なのだと思いますけれども、どう北海道の新幹線を捉えていただくかということは非常に重要なことだというふうに思います。

○石田氏 ありがとうございます。

最後になりましたけれども、猪飼様、お願いいたします。

○猪飼氏 私の方から大きく分けて二つ、一つはインフラの関係と、もう一つはイノベーションとの関係についてお話をさせていただきたいと思います。

まず一つは、インフラ、参事官さんから説明いただきましたこの資料の中にも、交通ネットワークの維持・向上とありますが、これは非常に大事だということを最近感じたことがありますので、簡単に御説明させていただきたいと思います。

今年の3月に、いわゆる外環状線と言っているのですけれども、高速道路が函館ジャンクションから赤川ジャンクションまで、そんなに長い距離ではないのですけれども、オープンになりまして、多分、今日、建設関係の社長さん方もたくさんみえているように思いますけれども、色々御協力いただいたことは大変ありがたかったなと思っております。

というのは、私の職場は、工業技術センターというところは函館の北側でして、七飯町に近いところなのです。住まいは渡島振興局のある辺でして、産業道路のもう一つ北側にあります学園都市線というのを通って工業技術センターにずっと通勤しているのですけれども、これまでは函館新道と学園通が交差するところがいつも渋滞になりまして、かなりの時間、待っているということが多かったのです。しかしながら、3月に赤川の向こうの高速が開通いたしまして、北斗や七飯に通勤するかなりの方々があの高速を使っているのではないのかなという感じがしまして、信号の待ち時間が本当に信号1回ぐらいという形になっておりまして、産業道路の方もそうかもしれませんが、確かに交通インフラの整備をすることによって、通勤の時間帯がこんなに変わるのだというのを本当に痛感しておりますので、函館は是非、これは市長さんがいないから、市役所は関係ないですけれども、空港までつながっていただければもっといい形になるのかなというのが1点であります。

それから、二つ目は、今回の計画の中に、特に16ページの中では産学官金の連携によるプラットフォームとかイノベーションの推進というのが謳われておりますし、25ペー

ジから28ページにかけましては、イノベーションによる農林水産業の振興、あるいは食の高付加価値化、食の海外展開ということを非常に詳しく計画の中に記入していただいております。これは我々イノベーションを担当する側から見ても大変ありがたいことだと受けとめております。

というのは、例えば26ページの中には、一番下のところに、イノベーションと水産業の振興のところ、磯焼け対策の表現が載っております。我々工業技術センターで一つ研究開発をした例を紹介したいと思うのですが、実は海藻は、最初の2年間というのは成長がものすごく遅いのです。ちょっとしか伸びないのです。そのときに幾ら植えても、成長が遅くてちょっとしか伸びていないところをウニにみんな食べられてしまうと、結局磯焼けになるのかなと、これはすみません、私の勝手な認識ですので、どこまで権威で、学会の方で証明されているかというのは分からないところがありますけれども、どうも実感としてそういう感じをしております。

それで、最初の2年間を陸上で養殖をして、ある程度大きくして、コンクリートブロックの中に植えて、それを海の中に置いておけば、若干、ウニに食べられたとしても、いい藻場形成になるのかなという形で、今、道の方でも少し実験的な取組もやっております、ハタハタの産卵床とかという形で、海藻が、ウガノモクという、ここだけにしかとれない海藻らしいのですが、非常にハタハタが来て卵を産んでいく効率もいいというような実験が出ておりますので、これを進めていけば、北海道、特に日本海側は、磯焼け対策というのが各首長さん方にとって大変大きな問題ではないかと思っておりますので、そこにイノベーションとしての研究開発への協力ができるのかなというふうに考えております。

それから、28ページとか各所に出てくるのですが、生産・流通システムの高度化、集出荷の省力化、効率化というところで、高鮮度輸送技術という表現が出てきます。これはどういうことかという、わかりやすくいうと、冷凍で持っていったら値が下がってしまうのです。特に東アジア、シンガポールも香港もそうですが、日系のレストラン、日本食のレストランとか寿司屋さんがありますけれども、これは私もシンガポールで経験しましたが、フレンチレストランのコースよりも、刺身があって、天ぷらがあって、焼き魚が出てきて、お吸い物が出てくるというコースの方が、実は2倍以上するぐらい高い状況でした。それだけ鮮度のいいものへの需要があるということですので、できるだけ生に近いものを、生で食べられるような状況で運んであげることが大事になるのかなと思っております。

そこで、海水に氷を入れただけで、魚のエラの部分は冷たくなりません。どうしても温度が上がってきますので、そこからバクテリアが繁殖してきて、生では食べられなくなるというふうになります。そこで、工業技術センターの方では、これは釧路にあるニッコーさんという企業と連携しまして、シャーベット氷、氷をシャーベット状にしたものに、魚とか魚介類を入れて運ぶという実験を今色々繰り返しております。

これ、実は根室でとれたサンマが、成田経由でしょうか、台湾まで持っていきまして、3日後だったのですけれども、台北のお寿司屋さんで刺身で食べられたと。なかなか札幌にいて生のサンマを食べるといのは、食べられるようになりましたけれども、札幌で食べるよりも、シャーベット氷で持っていった方が鮮度がよかったということがありまして、非常に高いものにはなるのですけれども、高くても、北海道の鮮度のいい食材がほしいという需要先にはピンポイントで送ってあげれば、これはこれでまた北海道の輸出の拡大とか、水産業の非常に大きな振興策になるのかなというふうに考えております。場合によっては、農業産品の中でも非常に高いものにつきましては、そういう輸送というの也有可能になるのかなと思っております。

ただ、シャーベット氷というのは重いですから、これは飛行機で運ぶと、当然、重ければ重くだけコストがかかりますので、それをどの程度の量だったら、例えばシンガポールまでならもつのかとか、逆にアメリカまで持って行くにはどれぐらいにしなければならぬのかとか、こういうあたりについては、まだまだもっと研究をしなければいけないなというところがあるのではないかと考えております。

それからもう一つ、最後に、農林水産業、食品関連の振興ということで、イノベーションとの関係でいけば、先ほどお話ありましたとおり、北海道は原料出荷をしまして、本州の方で加工していただいて、高いものをまた買っているという、たらこと明太子の例とか、函館や根室でとれる昆布もそうでないかと思うのです。真昆布も有名なのですけれども、みんな本州の方で加工されてだしになっているという状況です。それはそれで、原材料を供給するというのは日本の食の安心・安全を保つということとか、安定供給という面では、役割はなくなることはないとは思っております。ですから、そういう努力は必要だと思っております。

ただ、先ほどガゴメ昆布の例でお話ししましたように、今まで見向きもされなかったものを、少し研究開発をすると、そこにすごい有効成分があるとか、こんな使い方が出来るということがわかれば、これまた新たな産業を起こしていくということになり得るのかなと思っております。

お話ありましたとおり、ちょっと資料にも出しましたけれども、ガゴメ昆布の製品は、約10年ちょっとで、累計しますと100億円の売り上げ、聞き取りでカウントできました。これまでは出して終わりだったのです。それが、同じ北海道、函館を中心にした道内で加工されて、製品で売られていきます。そうすると、漁師さんが漁協に出荷した額を地域でまた加工して売っていきますから、産業連関表でちょっと計算しますと、すぐ2倍ぐらいになってしまうわけです。私なりに電卓でたたいても、100億円の売り上げも、経済波及効果は220億円、10年間という累計になりますけれども、1年間にしたら20億円を超えるぐらいの経済波及効果も考えられますので、こういったことを、まだガゴメだけでこういう状況ですので、実はまだ眠っている海藻にこんな成分があるとか、そういったものがあるものですから、是非そういったあたりにも、なかなか国土交通省さんと

こういうイノベーションの研究機関との距離というのは遠いかもしれませんが、こういう全体の計画の中で上げていただきますと、これまたさまざまな色々な国や道の関係の中から、そういった点にまた目が向いていくということも大事なことだと思っておりますので、大変ありがたいことだと思っております。

○石田氏 ありがとうございます。

それでは、ここで谷口委員から、皆様から今御意見を色々頂戴いたしましたけれども、コメントを頂戴したいと思います。5分でお願いします。

○谷口氏 皆様から非常に多様な御意見をいただいたので、その内の特に感じたことを二つ三つお話ししたいと思います。

まず最初に感じたのが、北海道部会ということになっていますので、北海道で閉じた話なのかなと思っていたのですが、複数の方から、色々な方から、青森ととか、津軽ととか、実はこの地域は北海道で閉じていなくて、もっとゆるやかに色々なところとつながっているということがすごく印象的でした。道北地域の方は、もしかしたら樺太とか、道東の方、北方領土のところとか、これは北海道部会なので「3層から成る」と、地域を既存の分類で分けなくてこの中に書いているのだと思うのですけれども、本当はもうちょっとゆるやかに周りにつながっているということを連想させるような記述もあっていいのかなというふうに感じました。

それと、二つ目が、中野様がおっしゃっていたと思うのですけれども、国内のお客さんにも力を入れていきたいと。それが魅力的だったら外国のお客さんも来るはずだとおっしゃっていて、本当に私もそうだなと思っております。北海道は、特に昔の遺跡を見せるだけという観光地ではないですね。もっと知恵が、インテリジェンスが必要な、そういう種類の観光地だと思うのです。旅慣れた人ほど、成熟した社会ほどそういう観光地に向かうということで、今、観光は世界的にそういう方向に向かっていると思います。体験型とか、生活を見せるとか、さつき谷さんがおっしゃっていたような働く体験をするとか、そういう方向に向かっているなというのが、この資料に書かれている方向と合致しているのだなというふうに感じました。

私がすごいなと思ったのは、この資料で「人が重要」ということを全面に押し出している点です。普通、人が重要、人材育成というのは、文科省とか、そういうところだと思っていたのですが、それが国土交通省、北海道開発局さんが書いた。先見の明があると思いました。

もう一つ、今回、どなたも触れられていなかったのですが、強靱で持続可能な国土の形成というところに、災害対応ですとか、持続可能な環境対応とか、そういうところが書かれていました。この強靱で持続可能なという形容詞が、北海道では、日本全国どこでもそうかもしれないですが、どれにも当てはまる。強靱で持続可能な観光とか、強靱で持続可能な産業など。今、北海道の観光について一番思うのは、ちょっと北海道部会でも言ったのですが、隣の国からの観光客はこれからずっと増えていくわけでは絶対に

ないのです。永遠に増えるわけではなくて、どこかで頭打ちになるか、あるいはもっと激減する可能性がすごく高い。そのリスクが大きいのです。そのリスクにどういうふうに対応出来るかということで、多分、中野様が、国内のお客様もちゃんと見据えて、バランスをちゃんととっていかなければいけないとおっしゃったと思うのですけれども、それはまさに強靱で持続可能な観光だと思いましたので、この形容詞、どこにも当てはまるなど。全部に当てはめていきたいなど、私も北海道出身ですので、北海道が是非これからも発展して行ってほしいなと思いました。

以上です。

○石田氏 ありがとうございます。

私からもちょっとコメントさせていただきたいと思います。

今日、6人の方にお越しいただきまして、自己紹介を兼ねて、どんな活動をされているか、あるいは中間整理についての御意見を承りました。

この会議の名称が北海道価値創造パートナーシップ会議というのですけれども、皆さん、価値創造をそれぞれのところで本当に立派にというか、成果を上げられているなどということで、非常に感激をいたしましたし、こういう皆さんと一緒にこれから価値創造パートナーシップ会議が進んでいくと、計画は作るだけでは駄目で、実施するというふうに岡部局長はおっしゃいましたけれども、それだけでも駄目で、実現しないと駄目だと思うのです。ですから、こういう皆さんとこの会議を続けていけるといのは非常に素晴らしいことだなというふうに思いまして、改めてお礼を申し上げたいと思います。

ただ、皆さんの御発言の中にもあったのですけれども、立派に価値を創造されているのだけれども、問題は、それによって生み出された現金収入というと生になりますけれども、どう地元で再分配するかというところまで踏み込んで考えないと、なかなか元気が持続しないということだと思っております。

今、谷口先生が持続性とおっしゃいました。あるいは強靱化ということも、根本は人だと思しますので、人が豊かにハッピーに暮らせるための、やっぱり基盤をちゃんと作らないといけないのです。北海道局ですので、国土交通省ですので、産業政策というところまで踏み込んでというのはなかなか難しいのですけれども、そういうことが大事だなというふうに思いました。

それと、ブランドという話がございました。そもそもブランドという意味は、皆さん御存じだと思いますけれども、牛の烙印、焼き印ですよね。あれをブランドというのです。ですから、何か違いが分かればいいのですけれども、多分、それだけでは駄目で、中野さんが盛んにおっしゃっておいりましたけれども、プロモーションに向けて最大の努力をしないといけないということだと思われました。

ですから、北海道のブランドというのは、今なかなかそれだけではもう駄目になるかもわからないということを服部さんからお伺いいたしましたけれども、そういうこともあるのかなというふうに思います。

今、ブランドと絡み合わせますと、地方創生ということ、この開発計画の一つの大きなテーマも地方創生でございますけれども、そこを考えていくときの本当に大事なことは、その地域の特徴とかブランドとか、オンリーワン性とかというのをどう作り上げていくかということと、それよりもっと大事なのは、それをどう楽しんでいただける方、消費していただける方にお伝えするかということでございまして、そういう意味では、説明する、あるいはそれを体験してもらう。野菜ジュースの話をしていただきましたけれども、あるいは食育で、地域だけではなくて、シンガポールもマレーシアもということをやるとは、そういう物語とか苦労話というのをどうお伝えするかという、そのための仕掛けとかノウハウというものの蓄積が大事なのかなというふうに思いました。

政府もこれからはローカルアベノミクスだというふうにおっしゃっておりますので、是非そういうことを盛り込んで、さらに開発計画を前進させていくべきだというふうに思っております。

3番目が、今回の中間整理は色々アイデアが盛りだくさんでございまして、いいことがいっぱい書いてあるというふうに思うのですが、その中でも、やっぱり生産空間を維持するというのを打ち出しております。皆様方、奇しくも農業と観光ということについて言及していただきました方々が多かったですけれども、やはり農業で生産をしている現場をどう維持していくか、そのための基盤のあり方とか、交通ネットワークのあり方、あるいはそういう空間を楽しんでいく、それは観光ということであるのですけれども、観光をさらによくするための空間のあり方、インフラのあり方というのが、これまでそういうインフラ整備という、生活をどう維持するかということが中心だったわけです。医療機関に早く行けるとか、それも非常に大事なのですけれども、やっぱり生産というところに重点を置いた考え方をしております、そういう点からも、今日、色々な御意見とか、活動を通じての感想、アイデアをいただきまして、非常にありがたいなというふうに思いました。

私からは以上でございます。

引き続きまして、これからそろそろ意見交換というか、自由に、色々な形で御議論いただければと思うのですけれども、その前に、皆様方から北海道総合開発計画、今回、8期目になります。ちょっと長過ぎるのでないのという、8とかいうと新鮮味が、私自身、すみません、こんなこと申し上げて申し訳ないのですけれども、多少どうかなというふうな気もいたします。中身はいいのですけどね。行政への期待について、ふだんの活動の中で、あるいは今日の議論を通して、御意見等をいただければと思います。

すみません、お一人また3分程度で、最初の順に戻っていただいて、猪飼様から順にお願いしたいと思います。

○猪飼氏 先ほどもお話しさせていただきましたように、今回の計画の中には、産学官の連携とか、イノベーションの推進ということがキーワードの中に出てきております。これを担う担い手の存在、これが非常に大事になるのではないのかなと思っております。産学

官金、金は金融機関の協力というのが大事になると思って、いい取組だなと思っておりますが、我々工業技術センターの立場から言いますと、どうしても行政側からの公的なこういう研究機関というのは、なかなか人を増やしたりとか、あるいはやめた後の維持補充だとか、こういうのが非常に難しい状況。それから、研究機器の更新、非常に日進月歩で技術が進みますので、せっかく持っている機械も使えなくなるとか、こういったことがありますので、そういった面への応援がもう少し国全体としても、地方の公設研究機関の方にも応援していただけるような仕組み、国土交通省さんとは少し距離があるかもしれませんが、色々側面で応援していただけるということはありがたいかなと、助かるのかなと思っております。

それから、19ページとの関係もありますが、今日、冒頭からお話ありましたけれども、農林水産業の6次産業化、谷観光農場さんのような取組がたくさん広がっていけば、北海道の農業にとってもいいと思いますが、なかなか現実には農家の方、あるいは漁家の方が、生産して出荷するので手一杯という方が多いわけですし、そこにまた手を加えて細かく売っていくとか、加工するとかというのは、なかなか難しい問題があるのが現状ではないかと思っております。多分、谷さんのところのように、後継の方が、若い方がいらっしゃれば出来るのかなと思うのですが、年配者だけで、御夫婦でやっているところに、そういうことをやれといってもなかなか難しい状況があると思います。

そういう意味で、全部農家や漁家の方に任せるのではなくて、地域の食品加工業とか、そういった地元の企業さんが、地元のとれた製品について、加工して、付加価値を高めて売っていく、これは地域で見れば、先ほどお話ししましたように、連関表で見れば数字がどんどん積み上がっていく形になると思いますので、そういう取組を応援出来るようにしていければいいのかなと。

どうしても農業は農協さん、漁業は漁協さん、中小企業は商工会で、信金は信組、銀行さんと、みんな縦割りなどころがありまして、ちょっと横に何かやろうとしても、あちこち隘路にぶつかっていくという状況です。最近、北洋さん、それから道銀さんも、農業関係、水産業関係にも色々手を入れていこうという姿勢を示してくださっているのは大変いいことなのですが、それが浸透するにはまだまだという感じがしますので、是非我々、地域で6次産業化を進めていく産学官金のプラットフォームという形ですが、これをさらに継続的に発展させていけるような取組を応援していただければありがたいかなと思っております。

○石田氏 ありがとうございます。

続きまして大内さん、お願いします。

○大内氏 私も人材育成のところでも少しお話をさせていただきたいのですが、来週なのですが、北海道教育大学函館校さんと連携をして、市民公開講座なのですが、開講することになりました。講師は首都圏の第一線で御活躍されていらっしゃるプロフェッショナルな方をお呼びしてということで開催をするのですが、私どもも色々地域で連携

をさせていただく中で、銀行の人脈であったり、例えば財団さんの人脈であったり、開発局さんの人脈であったりというところでいいますと、それぞれがそれぞれの特徴のある人脈を持っておりまして、今般も、この市民公開講座の人材派遣のところでは、新日本スーパーマーケット協会という、東京のスーパーの協会さんと連携しているのですけれども、そういったところの人脈というか、つながりを活用させていただいています。このそれぞれが持つ人脈をそれぞれに落とし込んでいくという作業をすることが、人がどんどん替わっていても、担当者が替わっていても、地域にそのネットワークが残っていくというような形になっていくのかなというのを、去年、色々な関係機関の方々と連携していく中で気がついたところになりますので、これが全道各地域でそういった形でネットワークを継続して、特に銀行とか自治体とか官公庁さんは人がどんどん替わっていくので、その力というか、パワーを低下させないような仕組みみたいなものも考えていかなければいけないのかなというふうに思っております。

以上です。

○石田氏 ありがとうございます。

では谷さん、お願いします。

○谷氏 先ほどもお話ししておりましたとおり、農業の観光化ということで、大変難しい問題がたくさんあります。農業の特色は、地域や専門によって、作るものも違いますし、多方面との交流によって地域の活性化があれば、農家にとっても活力にはなるのではないかなと思っております。

具体的に言いますと、多方面による交流や連携によって、今まで農業単体で難しかった資金の調達だったりだとか、人材の募集、どうやって募集をかけて人材を呼ぶかということもありますし、広報、うちでこんな野菜を販売していますだとか、集客などの可能性が、連携や交流によって広がるのではないかなと思います。そして、この交流によってさまざまなパイプができて、連携によって地域のネットワークもつながるのではないかなと思っております。猪飼さんもお話ししておいたとおり、一般的な農業はたくさん難しい問題が本当にあるのですが、一般的な農業体験は、お子様だったり奥様方だったりとか、そういう方向けの農業体験はたくさんあるのですが、農業に関心のある人が農村で働けることだったり、農業が魅力的なことを発信出来るような場がちょっと少ないのですね。農業をやりたい人が、例えばこの農業をしたいだとかというのに応えるような環境整備も重要ではないかなと思っております。例えば農業の技術を教える場だったりだとか、生産者との交流の場、そういうやりがいの持てるの魅力を発信出来るために、研修希望者の募集や就農の体験希望者の受け入れを可能にすることも重要ではないかなと思っております。今後の農業への関心のある人材の発掘や育成を受け入れる環境も必要ではないのかなと思っております。そして、私たち北海道に生まれていますので、豊かな自然だったり、おいしくて安全な食を、私たち農家や漁業の人たちが守っていかなければならないという使命を持っていますので、高く売ることも必要なのですが、付加価値をつけるために、生産性を具体

的に強化していかなければならないなと思っております。具体的に地域の人たちが地域に目を向けて、地域を愛して、地域に誇りを持つ、こういうことが地域の資源を利用することにもつながるのではないかなと思っております。やはり旅行の需要だったり、地域の郷土愛で、今後のニューツーリズムというのにもつながっていくのではないかなと思っております。

○石田氏 ありがとうございます。

続きまして中野様、お願いします。

○中野氏 地方創生ということで、先ほど人材の話が出ていましたが、やはり人口減少に伴って、景気もこの20年、30年でかなり下降しているということもあって、やはり雇用が少なくなったり、非常に感じるのは、若者がもう既に函館も減ってきていたり、色々なお祭り組織、団体の中でも、年々それを担っていく若者が減っているというのが現状になっています。その人口減少を食いとめるということが意識されてきてはいるのですけれども、なかなか簡単には地域の活性化とか経済の活性化というのが進まず、雇用の創出とかにつながっていないというのがあります。

現状、観光業界であるのは、やはり雇用自体はあるのですけれども、なかなか若者が来てくれないという問題があると思います。それは、観光の仕事というのは365日、カレンダーどおりに休めない仕事ということもあるせいか、若者が敬遠するのです。それと同時に、やはりそれほど収入も高額収入ということではないこともあると思うのですけれども、ですからその辺も非常に問題になると思います。ですので、これから新幹線開業後、観光客が増えて、地域にかなり交流人口が増えて、経済的に豊かになっても、もしかすると優秀な若者はどんどん函館を離れてということになるのかなということで、そこを懸念しております。ですので、やはり高額収入ももちろんですけれども、何かこの業界として働くプライドとかメリットみたいなものを作っていかないと、人材が残らないのかなと、非常に思っています。

それともう一つは、先ほど谷さんの方からもありましたが、やはり道德教育というか、郷土愛とか函館愛なり、南北海道、道南を愛する気持ちみたいなものをどう幼少期から植えつけていくかということが非常に大事なのかなと。住みやすいまちとか働きやすいまちというのはどこにでもあって、それぞれが今、地方創生で、地方都市が同じことを考えて今進めていますので、やはりそこに函館らしさとか、道南、南北海道らしさみたいな地域性というのが、幼少期のうちに子供たちに教えていかなければいけないのかなと。それは国土交通省ではなくて文科省の話かもしれませんが、そういうことを日々感じています。

それと、食と観光ということなのですが、国土交通省さんの中にある観光庁さんの方の色々研修とかに出たこともあるのですが、なかなかまだ観光業界というのは、産業としての位置づけはまだまだされていなくて、非常に難しい。総合産業ではあるのですが、30年ぐらい前の、観光が一番栄えていた、日本全国の観光がピーク

だったのですけれども、その当時というのは、やはり団体旅行が中心で、観光バスで移動する観光客が立ち寄るところだけが何となく観光業界みたいな形で位置づけられていたのですが、今はもう個人旅行化して、コンビニに寄って買い物しても、ガソリンスタンドで給油しても、それは交流人口、観光客が落とした消費ということで、観光消費ということにみなされると思うのですが、その辺の認識がまだ一般的でなかったり、地域を挙げて、北海道を挙げて観光客をどう呼び込むかという部分がまだまだ浸透していない部分があると思いますので、そこをどう地元の方たちが認識していただくように持っていくか、そういう部分もあると思います。

ですので、観光の部分では、観光庁さんの勉強会に出ても、現状、正直言うと成功事例がまだないような状況で、逆に言うと、昔の方が放っておいても観光が栄えていた時代があったものですから、非常にこれから成功事例をどう作っていくかということが課題なのではないかなと。逆に、一般論で色々説明を受けても、なかなかそれがミスリードにならないかみたいなことがあって、やはり観光というのは、非常に地域性とか、アクセスの問題とか、色々な要素が、要因がかかわってのことなので、ほかの事例と同じことをやってもなかなか成功につながらないとか、そこは明確なのです。ですから、その辺も、広い北海道となると、全体で同じことというふうにはならないと思いますので、細分化して、やはり地域ごとの特性とかオリジナリティを活かしていただければなと思いますので、よろしくをお願いします。

以上です。

○石田氏 ありがとうございます。

服部さん、お願いします。

○服部氏 概要の5ページの「人が輝く地域社会」とありますが、人と人というのがキーワードになるのではないかと考えています。食文化や食生活というのは日々変わり生活環境にもよりますが昔は安ければ量が売れたという時代も中にはありました。弊社も量を売らなければ工場が回らない為、とにかく安く量を売っていました。しかし、ここ最近、消費税も高騰したということもあり、お金を出すならば、高くてもいいから少量のいいものが食べたいというお客様が増えており、

私共の売り方も考えなければならなく、人任せでの販売ではなくお客様の顔を見ながら生産者の私達が売るということも大切になるのではないかと思います。北海道には少量でもとてもいいものを作っている生産者の方がたくさんおります、これからは他社同士がコラボレーション商品などを作り、自社だけの利益を考えるのではなく、お互いがお互いを宣伝し合う売り方をしていくのも一つではないかと考えております。人と人が結び合い人が輝く地域が出来るのではないのでしょうか。

○石田氏 最後になりましたけれども、室谷さん、お願いしたいと思います。

○室谷氏 実は私も住んでいる江差町は、桧山郡、桧の山と書くのですけれども、現実問題として、本当に過疎の進んでいる北海道の代表的なところかなというふうに認識して

います。実質、日本の大きなプロジェクトの新幹線が、今、函館まで延伸されるというときに、実は今年の5月11日に、木古内から江差まで走っていたローカルの江差線というのがなくなりました。こういう現実が一つ確実にあるのです。ですから、こういう総合計画などを見るときに、多分、僕を含めて地元の人たちは、やっぱり一抹の寂しさというのを感じると思うのです。江差を含めて、桧山管内、道南へ行っても何も無いのではないかなということと言われるし、そういうコンプレックスというのは、きっと多分に心の中にみんな持っていると思うのです。でも、翻ってみると、取り残されているといいながら、人も少なくなっている。しかしながら、人が少ない分だけ、一人一人がちゃんと顔が見えているし、それから資源というの、ちゃんと探せばたくさんあるということが言えるのではないかなというふうに思います。

先ほど私、津軽海峡を挟んだ交流と話していましたが、さっき言った桧、あすなろということで、江戸時代の北前船の産業の主たるものは桧、あすなろ材でした。それが桧山郡の桧の山の名前の由来にもなっています。昨年、第1回目ということで、下北で津軽海峡を挟んだヒバサミットというものをやったのです。ヒバをベースにしたまちづくりができないかということで、今年2回目、9月の末に江差町で行いますけれども、江差にはそういうヒバをずっとずっと植えている人がいます。それから、古事の森といって、400年強、なたを入れない、斧を入れない森をそのまま残していこうと、そういうところも残っています。隣の乙部町には縁桂という立派な木もありますし、厚沢部に行くと、レクの森、国有林だった立派な歩道も残っています。それから、上ノ国町は本当に天然林のヒバの残っているところです。ですから、私たちはそういう機会に新たな取組として、森林を使った観光だとか産業の、町の垣根を取り払った中で、若い人たちと一緒に新しいプログラムを作りながら、外から来る人に、森林の大切さだとか、それから車社会なので、やっぱりたくさん木を植えていただくと、そんなことをしながら、新たな観光だったり、産業の取組が出来るのかなというふうに思っています。

たくさんの方のニシンというのがとれて、江差町が栄えたのですけれども、全く大正2年から姿を消したきりなので、今、留萌とか小樽まで回帰していますし、ニシンの放流も国の事業として、北海道の事業として行っています。そんな小さな取組なのですが、そういう中から、もっともっといいもの、それから幕末の歴史もありますし、たくさんの方が、例えば100万人、200万人の方が来なければならないまちもありますけれども、僕らの地域は本当に小さなところで、10万人、20万人来ると、一人一人の顔が見えて、より交流といいますか、観光でない交流、つながりのある交流ができていくのかなと、そんなところを私たちは目指していかなければならないのではないかなというふうに思っていますし、そういう可能性というのは大いにあるのではないかなというふうに思っていますので、是非北海道の総合開発計画の中にも、何か取り残された感のあるような、そんなところにも光を当ててもらいながら、間違いなくそこに住んでいる人もいますし、歴史もちゃんとあるのだよということを、特に北海道の場合は、北海道の歴史という

と開拓使の歴史みたくなくなってしまって、北海道庁の歴史になるのですけれども、江差の隣の上ノ国町は800年の歴史がある松前藩の先祖が来たというところで、そんな歴史も是非取り組んでいただきながら、総合計画の中に活かしていただければというふうに思いました。

以上です。

○石田氏 ありがとうございます。

それでは、谷口先生からコメントをお願いしたいと思います。

○谷口氏 2巡目の皆さんのお話では、人材育成の話が色々出ていました。人材育成といっても色々な種類があると思うのですけれども、まず最初に皆さんが思い浮かべるのが、教育といえば子供の教育だと思うのです。子供たちに何を教えていくべきか、先ほど北海道学を北海道の子供たちに教えていくということを今後検討されると北海道局の方から教えていただいたのですが、それはすごく重要だと思います。ただ、その効果が目に見えて現れるまでには時間がかかるのですよね。今、小学生に教えても、多分、彼らが本当にちゃんと色々動けるようになるのは30歳とか40歳とかだと、20年、30年後になってしまいます。もちろん子どもへの教育は必要なのですが、それと同時に、大人の意識も変えていくような教育、人材育成も必要だと思います。また、そういう人材育成というよりも、もっと具体的な、地域ブランドをどうやったら発見出来るか、こういうふうにやったらうまく地域の特徴を見つけられるんだよというようなことを支援する仕組みがあったらいいなと思います。これは国交省さんなのか経産省さんなのか担当省庁はわからないのですが、連携して出来ると思うので、そういう地域内の異業種連携は重要ですとか、こういうふうに地域の広告代理店さんを使えば、使うという言い方は失礼かもしれないのですが、一緒にやっていけばすごくうまくいくよとか、そういう具体的なノウハウは教えられるのかなと思いました。

あと、子供と大人に是非教えた内容としては、地域の歴史や物語、先ほど室谷さんがおっしゃっていた物語、一人一人の物語があって、それが地域の物語になって、まちの物語になって、それが北海道の物語になるという、その辺は是非教えていただきたいです。一方で、少し異なる観点で、自分の消費行動が地域経済にどうつながるのかという話を、今の小学校のカリキュラムではあまり教えていないのです。自分が、例えば世界的に有名なチェーン店のハンバーガーを買ったと、それがどこの国の材料を使っているのか。例えばダーウィンの悪夢という有名な映画がありました。アフリカの貧しい国のある都市で唯一ある産業が、どこかの湖でお魚をとることで、とても安い値段でお魚をとるのですけれども、それが実は大きなチェーン店のフィッシュバーガーにつながっているとか、自分がもし服部さんのお味噌を買えば、それがどうつながるのか。地域の経済にもつながりますし、顔の見えるもので安心できる、そういうことをきちんと教えていくことも必要なのではないかなと思います。谷さんの農園でおいしい野菜ジュースを飲んで、うちの裏庭でも作ってみようとなるかもしれないですし、作るのは大変だから近所の八百屋さんで地元の

旬のものを買おうというふうになるかもしれないですし、そういうことも教えていっても
らいたいなと思いました。

以上です。

○石田氏 ありがとうございます。

私からもちょっと話させていただきますし、もし可能でしたら、その後でコメントな
り、色々北海道局、開発局からの追加説明などをいただければと思います。

皆さん、国土交通省だから産業政策はできないでしょうとか、教育は難しいよねとい
う、非常に御理解のある発言をいただきましたけれども、私、ちょっと違うのかなと思っ
ていまして、役所ですからテリトリーというのはあるのですけれども、国土交通省の主た
る任務というのは社会資本をどう整備するかということですよ。社会資本というと、道
路、鉄道、上下水道、公園というふうな物的施設だけを思い浮かべるのですけれども、そ
このところを中心にやってきたので、国土交通省はトンカチ集団だとかと言われてきたわ
けです。でも、社会資本は我々の都市とか生活を支えるものであるというふうに考えます
と、これは自然環境なども非常に重要な我々に共通の社会資本なわけですね。道路は必ず
しもそういうわけにいきませんけれども、例えば北海道開発局さん、道局さんで、もちろ
ん河川とか農業部分というのは環境に極めてかかっているわけですね。だから物的資本、
環境と、もう一つは、やっぱり国の制度、社会の制度というのも非常に重要な社会資本で
すね。これは金融は金融庁とか財務省とかあるのですけれども、やっぱりその中でも、皆
さんおっしゃっていただきました人材とかコミュニティの育成というのは、これは国土交
通省だと思うのです。ですからそういう意味でいくと、皆さんがおっしゃった色々なとこ
ろの連携とか人材育成というのは本当に大事な国土交通省のお仕事ではないのかなとい
うふうに思いますが、いかがでしょうか。テリトリー上、なかなか難しいこともあるのです
けれども、是非というか、皆さんの今日の御発言はそういうインプットを与えていただ
いた意味でも非常によかったのかなというふうに思いました。

2番目が、特に猪飼様がおっしゃっていただいたのですけれども、イノベーションとい
う言葉があるのですけれども、イノベーションには色々な種類があるのですが、よく言わ
れるのは、破壊的なイノベーションということが言われます。どういう例を言えばいいで
すかね。コンピュータの発展の歴史を考えますと、IBMなどがでっかいメインフレーム
マシンというのをやっていて、IBMはそれで食っていたから全然問題意識がなかったの
ですけれども、そこに参入できなかったビルゲイツとかスティーブ・ジョブズがパーソナ
ルコンピュータという新しいものを作りましたら、それは昔のIBMが作っていたコン
ピュータを席卷してしまったわけです。マイクロソフトはそれで謳歌をしていたら、さら
にそれの上をいくスティーブ・ジョブズさんがスマホを作って、今やスマホはパーソナル
コンピュータにもうすぐ取って代わるだろうと。そういう我が春を謳歌していた別のとこ
ろから次世代を担うイノベーションが出てくるということですから、そういう意味では、
今北海道はピンチなのだけれども、逆にチャンスかもねというふうに思いましたので、ど

ら、今更に新しい提案をしていただくということが、今後のパートナーシップ会議でも本当に大事なことはないのかなというふうに思いました。

それと、観光のあり方、私も本当にそう思っております、色々な人が色々なところで、これからは団体旅行から個人旅行だと。そのための各観光地でのディステーションマネジメントというのが大事だというふうにおっしゃるのですけれども、なかなかうまくいっていない。これは先ほど申しましたように、色々なところで色々な方が付加価値をつけて、作って創造されているのですけれども、それがなかなか元に戻ってこずに、今も既得権益の中で、権益を持っている人のところに価値が帰属してしまっているという構造があるので、これはやっぱり観光庁さんに是非指導力を発揮していただかないといけないなというふうに思いました。

長くなりましたけれども、我々のコメントとか、あるいはさらにこんな議論もしたいとか、あるいは道局、開発局の皆さんから何か感想等ありましたらいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

○岡部北海道局長 では少し質問というか、こういうところが抜けていたなというところで、室谷さんから北前船のお話があって、例えば北海道の色々なことを考えるときに、北方領土の問題ですとか、奥尻とか利尻とか、国境隣接地域のことは、この中には実は書いてあるのです。先ほどからお話があった津軽との交流とか、北前船を使った日本の交流とか、そういうところをもうちょっと何とか、他の地域との交流という意味で取り込むことはできないのかなというふうには少し思いましたし、国内旅行者のことを中野さんがおっしゃられて、今、もちろん売りは外国の方が全国的にどんどん増えているということで、それも北海道も遅れずにとりか、全国よりもさらに進んで受け入れ態勢をとっているというふうに思っておりますけれども、特に最近、テレビでも、中国の経済が危ない、減ってしまうのではないかと、そういうようなお話もありますので、海外の方は、私たちの書き方というか、先生方の意向も、もちろん国内の方がある海外だという思いはあるのですが、そこはあまり読まれる方に誤解を受けないような書き方を工夫しなければいけないかなと、そんな感じがいたしました。

簡単ですが、以上です。

○石田氏 ありがとうございます。

残り時間10分ぐらいしかないのですけれども、10分で自由にディスカッションしましょうというのもなかなか難しいのですが、どなたからでも、何でも結構です、いかがでしょうか。ないですか。

○岡部北海道局長 すみません、質問を、谷さんにお伺いしたいのですが、観光農園で、すごく健康に気を使っているお客さんがたくさんいらっしゃるということなのですけれども、それは例えばどういうカテゴリーという変ですが、男性か女性とか、年齢でいうとどの辺りとか、道内の人か道外とか、もしそういうあたりがもう少しわかれば教えていただきたいと思っております。

○谷氏 主に身近で言いますと、近隣住民の方が健康番組を見て、野菜を買いに来て、うちは色々な種類の、25種類以上の野菜を作っています、直売しているのですが、テレビで見たもの以外で、これは何に効くのだとか、そういうふうに質問される方が多くいらっしゃいます。それ以外で、首都圏のお客が多いので、北海道の新鮮な野菜なのですが、これは美容にいいのですかだとか、そういう若いお客様の反応も結構強くあります。

○石田氏 いかがでしょうか。御遠慮なく、時間ありますので。

猪飼さんから、6次産業化はわかるのだけれども、実際に難しいよと。その難しさは谷さんが一番御存じだと思いますけれども、どうすればいいでしょうねといってもなかなか難しいのですけれども、やっぱりある種のコーディネーターみたいな人が要りますよね、コーディネーションするとか、マーケティングするとか、あるいは輸出するのだったら輸出手続なんて、私自身も知りませんし、知っている人なんていませんよね。そういうコーディネーターみたいな人は……。

○猪飼氏 私、この仕事、4年ぐらいたちまして、6次産業化は、道にいたときも農政部の方で一時ちょっとかかわったことがあるのですけれども、農家さん、漁業家の経営のあり方を見ると、本当に先ほどお話ししましたように、とって出す、出荷するだけで精一杯。特に男性の方々は、ロット勝負なのです。畑で、何ヘクタールでこれだけの米をとった、これだけの野菜をとった、サンマを1回とりに行って何トン揚げたと、これで何百万円、何十万円という世界なものですから、そんな細かいことなんかやっつけられないというのが事実です。それがまた男のロマンという形で、これまで北海道の農業や水産業がきたのは事実であります。

だけど、付加価値を見ると、規格に合わないものは、結局、市場に行かないわけなのです。投げられたりとか、場合によっては近所にただで配ったり。でも成分や味は全く変わらない。そこをやっぱり女性の方で加工して売っていくということが大事になってくるのではないのかなと思っておりまして、これは安倍さんなどがおっしゃるとおり、やっぱりこれから日本の社会は女性の力を活用していくということに通じるのではないかと思いますけれども、多分、谷さんのところでこういう若い女性の方が現代的な感覚で、しかもあるいはネットとかパソコンなどを使って色々な発信をしてうまくいかれているのかなと思っております。それをやっぱりアピールして、たくさんそういう人が出ていただくということが大事になるのかなと。

そういう意味では、それを世の中に知らしめていくコーディネートをしていったりとか、アドバイスをしていく人の役割も非常に大事になるのかなと思っております。

もう一つ、先ほどもちょっと触れましたけれども、もしその農家さんが大変だったら、その周辺にある加工屋さんとか工場とか企業が、そこでできたもの、農協、漁協を通して大都市に行くものもありますけれども、さっき言いましたように、ハネモノというのは多分いっぱい、出す以上の、倍ぐらいのものが多分出ていると思いますので、そういうものは地域で加工してあげればいいのかなど。

ガゴメ昆布も、お話ししますと、真昆布と何がいいのかというと、加工しますので、品質が悪くなくてもいい価格になるわけなのです。真昆布は品質が悪いと3分の1ぐらいに浜の値段が下がってしまうわけです。ところが、ガゴメの場合ですと、加工して刻んで使いますから、若干品質が落ちて成分は変わりませんので、そういう使われ方があります。そういったものというのはまだまだいっぱいあるのかなと思うのです。そこに目を向けていただけるような仕組みの応援。だから、そこには地域の企業がやると、どうしても経営的な問題がありますから、金融の連携というのは我々は大事にしていると思うのです。色々最近では北洋さん、道銀さんも1次産業部門の加工の方に少し手を入れてくださるような傾向も出てきていますので、これを大いにうまくやっていきたいなと思っておりますが、全部金融機関に任せても、情報もわかりませんので、そこは我々研究する部門が情報提供してあげれば、これもある意味、コーディネーターとか、そういう役割になるのかなと思っておりますので、その辺が大事になってくるのかなと思っております。

○石田氏 品質がとおっしゃいましたけれども、見た目という意味での品質ということですか。

○猪飼氏 これは谷さんの方がわかると思うのですけれども、見た目もありますし、大きさですよ、規格の……。

○谷氏 そうですね、ナスビでいったらば、曲がっていたりだとか。

○猪飼氏 それは駄目ですよ。

○谷氏 そうですね、真っすぐ伸びていたものでないと出荷できないだとか、サイズが大きくなっていくとB品になってしまっても出荷できませんので、そういうものがたくさん出てしまったときに、私たちは農協頼りではなく直売所というのを併設していますので、そこでさばいたりだとか、販売先をちょっと見つけて、生産の調整をしております。

○石田氏 ありがとうございます。

○猪飼氏 そういう意味では、服部醸造さんのところが地域の大豆を使って味噌に加工するというのは、これはまさに地域の6次産業化の一番のモデルではないのかなと思っておりますので、技術の面では我々センターとも色々やらせていただいていますので、大変いいことかなと思っております。

○石田氏 何かございますか。

○服部氏 谷さんがおっしゃっていたように、B品のような売れないものを加工して作るのも弊社のような製造業者の役目かなとは思っています。しかし、それをやるためには、やはり設備も必要なもので、そこを今後どうしていったらいいのかな？という悩みがあります。地域でそのような加工出来るものがあるのであれば、どんどん活用していきたいなとは、前向きには思っております。

○石田氏 最後に私から局長に質問というかお願いなのですが、北海道価値創造パートナーシップ会議in函館としか書いていないのですけれども、実施に向けて、これからは連携をと冒頭おっしゃいましたけれども、こういうふうな会議体とかパートナー

シップのプラットフォームというのは続けていくというふうを考えてよろしいでしょうか。

○岡部北海道局長 今、石田先生の方からお話がありましたけれども、今、皆さんからの話を通じて、やはり共通しているのは人材の問題とか連携の問題とか、そういうのがあります。先生からちょっとお話いただきましたけれども、国交省は、どちらかという、例えば道路を作ったりとか、そういうハードものの方が得意分野ではあるのですけれども、政策の一つとして、北海道をどうやって元気にして、我が国全体に北海道の魅力なり価値を活かしていくかというのも一つの視点です。

そのときに、やっぱりハードの基盤整備の上で、色々活動していただく皆さんの、これまでは、例えば農業なら農業だけとか、観光なら観光だけというようなことでここまで来た面が多いような気がしますけれども、例えば今回テーマにしています観光と食を戦略産業にというふうに言っているのですけれども、皆さんの話を聞くと、いかに食と観光をうまくリンクさせて、双方の価値を高めていくとか、そういうことも多分テーマになってくるのではないかなと思ってまして、そのときに、我々の役割は、では直接食について何かわかっているかという、なかなか難しいところがあるし、観光についても専門の人ほどは分からないのですけれども、食と観光に関係ある人、ちょっと集まってみてくれませんか、そういう場を作るということは、僕らは出来るのではないかなと思ってまして、そこに皆さんに集まっていただいて、そこで色々議論して、何か問題点が解決できないとか、新しい知恵がないとか、こんなことやったらうまくいくかもしれないねというような話ができれば、せつかくこの地域が持っているいい資産を活かす方にうまく動かせるのではないかなと思ってまして、是非そういう場を作っていくことをやっていきたいなというふうに思っていますし、そのことが、我々が今立てる計画を推進するというか、実現に向けて近づけることになるのではないかなというふうに思っていますので。

○石田氏 力強い御発言をいただきましてありがとうございます。

今の御発言いただきましたので、そろそろ時間も過ぎておりますので、私の司会はこれぐらいにさせていただきます、事務局に司会をお返しいたします。

どうもありがとうございました。(拍手)

○小林開発計画課長 石田委員、本会議の司会、どうもありがとうございました。

出席の皆さん、活発な御意見、どうもありがとうございました。

6. 閉 会

○小林開発計画課長 最後に一応、局長、締めということになっていますが、すみません、よろしく願いいたします。

○岡部北海道局長 皆様、どうもありがとうございました。今日は貴重な御意見、それぞれのお立場、それぞれの関わっておられる分野、あるいはそれぞれの方の経験を踏まえたお話をいただきました。今後の計画策定に大いに参考になるお話を聞かせていただいたと

いうふうに思っておりますので、今、先生から振られましたけれども、最後のまとめとしては、是非この計画を絵に描いた餅にしないで、それを実現していくということが非常に大きな我々の使命だと思っておりますので、そのプロセスの上でも、皆さんにまた御協力いただいたり参加いただいたりということで参りたいと思っております。

若干気になりましたのが、室谷さん始め何人かから言われましたけれども、どうも北海道全体をターゲットにしてやっているものですから、道南の感覚からするとちょっとずれているところもあるなというのは、実は私自身も気にしてしまして、先ほどお話のありました北前船から始まる、道南、特に桧山地区の歴史、これは北海道の他の地域にはないところですので、あまりこの中には出てきておりませんし、それから、新幹線を材料にしての青函圏、あるいは東北と道南圏のこれからの交流、発展の可能性とか、そういうところについても、計画の中にどういうふう書き込むかというのは難しいところがあると思えますけれども、十分意識して、今後また考えて参りたいというふうに思っておりますので、どうぞよろしくお願いします。

本日はどうもありがとうございました。(拍手)

○小林開発計画課長 以上をもちまして、北海道価値創造パートナーシップ会議 in 函館～新たな北海道総合開発計画に向けて～を閉会いたします。

本日は、御多忙のところ御参集たまわり、また、長時間おつき合いいただき、どうもありがとうございました。

これにて閉会いたします。